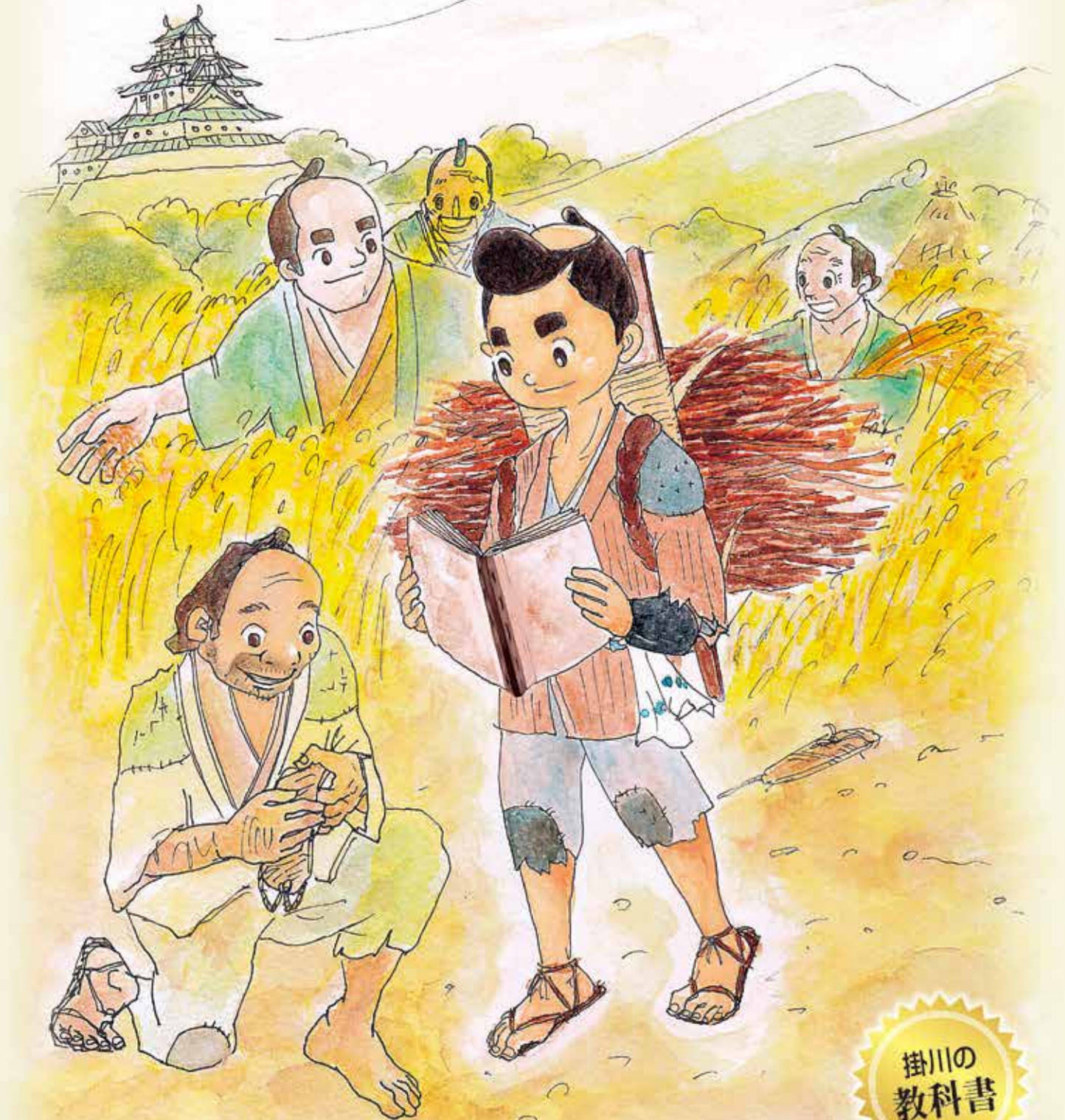


なっとく

なるほど 金次郎さん



掛川市教育委員会

掛川の
教科書



はじめに

掛川市教育委員会

教育長 山田文子

みなさんは、二宮金次郎にのみやきんじろうを知っていますか。金次郎は、大へん親孝行おやこうこうで、よくはたらき、そして、勉強も一生けん命にしました。そのため、今から70年くらい前、子どものお手本として、日本全国の小学校に、「まきをせおい、本を読む少年」の金次郎像ぞうがたてられはじめました。今現在げんざい、掛川市では市内22校の全小学校に金次郎の像がたてられています。

金次郎は、仕事をしながらも勉強にはげむ青年時代を過ごし、大人になると、まずしい農村の立て直しなどを通して、多くの人々を助けました。みんなのために生きた金次郎の生き方や考え方は、今でも、多くの人々に受けつがれ、尊敬そんけいされています。

ここ、掛川市には、金次郎の教えを広めるためにつくられた「大日本報徳社だい にほんほうとく」本社があります。金次郎の教えは、報徳の教えとよばれ、今でも掛川市民の心に根づいています。身近に見られる「一生けん命に学ぶすがた」や「思いやりをもって人にせつする心」「地いきをきれいにする様子」などは、その教えの表れでもあります。みなさんもよく目にするでしょうし、実際じっさいにそうした活動に参加した人たちも、たくさんいることと思います。

掛川市教育委員会では、平成23年に「なるほどなっとく金次郎さん」を作成せいせいしました。金次郎の少年時代の様子や、大人になった金次郎の活躍はもちろんのこと、金次郎の教えを広めた人々や今も行われている市民の活動なども紹介しょうかいしています。今回それを一部改訂かいていし、再版さいはんすることとしました。この本は、「掛川の教科書」として、小学校3年生のみなさんに配布はいふしています。みなさんが、この本を通して、金次郎の教えを学び、もう一度自分の生き方を見つめ直したり、自分が住んでいる地区や掛川のまちについて考えたりする機会きかいにしてほしいと思います。

金次郎の教えを今なお受けついでいるすてきな掛川のまちに生まれたみなさんが、夢ゆめに向かって、自ら考え、自ら判断はんだんし、心豊かこころゆたかにたくましく生きる若者わかものに育つことを心から願ねがっています。

平成28年4月吉日

目次

はじめに

この本の読み方 2

この少年はだれだろう 3

どこで会えるかな 4

金次郎かんけい関係地図 6

金次郎物語 第1部 子どものころの金次郎

 (1) 勉学にはげむ 8

 (2) 金次郎のわらじ 12

 (3) まきをせおった金次郎 16

 (4) わたしの油 20

 (5) 捨て苗すなえ 24

金次郎物語 第2部 大人になった金次郎

 (6) 服部家はっとりけの立て直し 28

 (7) 岸右衛門きしえもん 32

 (8) 木の根ほり 36

金次郎のカルタをつくろう 40

掛川市に広がった金次郎の教え

 (1) 岡田良一郎おかだりょういちろうと冀北学舎きほくがくしゃ 42

 (2) 倉真財産区林くらみざいさんくりん 46

 (3) 風吹トンネルかざふき 50

報徳ゆめの心と夢のある掛川に 53

金次郎ほうしに学ぶ奉仕の心 54

かがやく心が根づく掛川の学校 55

大日本報徳社を見学しよう 56

掛川報徳マップ 57

夢のあるまちづくり・人づくり 58

まちを歩いてみると 60

どんな自分にかわったかな? 62

二宮金次郎りやくねんぶ略年譜 63

参考文献さんこうぶんけん1・2 64

監修者かんしゅうしゃ・執筆委員しつぴつ 65

勤きん
労ろう

至し
誠せい

分ぶん
度ど

推すい
譲じょう

ほくは、かあ君。

金次郎さんの教えて何だろう。
この本を読むのが、
とても楽しみだな。
みんなもいっしょに
勉強しようね。



わたしは、けいちゃん。

金次郎さんの教えが、
どうして今でも掛川市で
大切にされているのかな。
どんな人が広めたのだろう。
わたしにもできることが
あるのか知りたいわ。



わたしは、
金次郎ものしり博士。

金次郎さんのことなら何でも知っているぞ。
どんなしつもんでも、答えてあげよう。
さあ、金次郎物語の
はじまり、はじまり。



この本の読み方

勤
勞

至
誠

分
度

推
譲

4つの教えで力をつけよう

勤勞の教え(3年生)

勤勞とは、一つのことにさい後まで真けんに取り組むこと。



至誠の教え(4年生)

至誠とは、真心をもって人や生き物、物事にせつすること。



分度の教え(5年生)

分度とは、自分にふさわしい生活を送ること。



推譲の教え(6年生)

推譲とは、人のためにゆずること。



この本には、金次郎さんの多くの教えの中から、4つの教えをえらんでのせてあります。そして、お話のページのしには、それらの教えを考えながら読んでほしいと思い、そのお話がどの教えにかんけい関係しているのか書いてあります。

また、この本は、主に小学校3年生から6年生が使って勉強します。3年生は、まず「勤勞」の教えを学んでほしいと思います。学習や仕事に、こつこつとどりやく努力することは、3年生にも取り組みやすいと思うからです。

同じように、4年生は、小学校のおり返し点をすぎ、高学年のじゅんぴをする年でもあるため、「至誠」の考えを学んで自分の心を見つめてほしいと思います。

5年生には、「分度」の考えを学んで、むだをなくして自分にふさわしい生活とは何かを見つめてほしいと思います。

最上級生の6年生は、もっともむずかしい「推譲」を学んで、思いやりの心を持ち、人のために行動する気持ちを育ててほしいと思います。

こうして学年が進むにつれて、勤勞から、至誠、分度、推譲と学びつづけることで、みなさんの心の中に、金次郎さんの4つの教えがめばえ、やがて大きくせいちょうして、みなさんの生活の中で生かされていくことをねがっています。

こんな
コーナーも
あるよ



なっとく
金次郎

・金次郎さんの教えを、わかりやすく博士がしようかいするよ。
金次郎さんのがんばるすがたになっとくだ。



チャレンジ
金次郎

・金次郎さんってすごいね。
さあ、君も金次郎さんの教えにちょうせんしよう。



なせなせ
金次郎

・クイズにちょうせんして、金次郎さんのことをもっと知ろう。

この少年はだれだろう

着物を着ていて
昔の子どもみたいだね。

何かせあいながら、本を
読んでいるね。なぜかな。



どうも
銅像になるくらいだから、
りっぱなことをした子
なんだらうね。



掛川駅前の像

この少年が
二宮金次郎さんです。



なせなせ

金次郎

①

①せなかにしょって
いるものは
何だらう？

②何の本を読んで
いるのだらう？

5ページを見てね。

どこで会えるかな



ほくの学校の
金次郎さんの像も
あるかな。

よこすか
横須賀小学校の
金次郎さんは
わらじをもって
いるよ。



にっさか
日坂小学校



東山口小学校



西山口小学校



かみうちだ
上内田小学校



第一小学校



第二小学校



中央小学校



そが
曾我小学校



さくらぎ
桜木小学校



和田岡小学校



さくらおか
桜が丘中学校



はらや
原谷小学校



はらだ
原田小学校



はらのや
原野谷中学校



城北小学校



さいごう
西郷小学校



くらみ
倉真小学校



みかさ
三笠幼稚園



ひしかた
土方小学校



さづか
佐束小学校




なか
中小学校



きとう
城東中学校


**なっとく
金次郎 ①**

金次郎さんが読んでいた本だね。
むずかしそうだね。

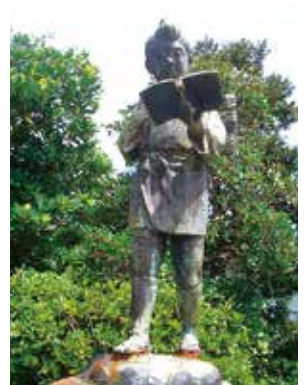


金次郎さんは、「^{だいがく}大学」や「^{ろんご}論語」といった中国のむずかしい本を読んでいたんだよ。わかるまで何度もくり返し読んでいたんだよ。

そして読みながら、自分で一生けん命考えたんだ。自分で考えるから、知識がしっかり身についたんだよ。




おおさか
大坂小学校



ちはま
千浜小学校



横須賀小学校



おおぶち
大淵小学校

金次郎物語

【第1部】子どものころの金次郎



第1部では、子どものころの金次郎さんの物語が始まるよ。いろいろな苦勞くろうをしながらも、一生けん命勉強にはげむ様子や、あきらめずにさい後までやりぬき、せいこうした話がたくさんあるよ。そうだ、みんなの学校にある金次郎像ぞうのなぞもとけるかな。



へえ～。子どものころの様子が物語になるなんてすごいな。いろいろな苦勞くろうがあったっていうけれど、だいじょうぶだったのかな。それだけすごい人なのかもしれないな。

金次郎さんのなぞがとけるの。それは楽しみ。わたしたちと同じ子どものころの金次郎さんって、いったいどんな人だったのかな。



(1) 勉学にはげむ

6才になったころ、金次郎は父に向かって言いました。

「お父さん、ぼくも勉強して字をおぼえたいんだ。勉強させてください。」

「なに、勉強をしたって。金次郎、お前はどんなことをおぼえたいんだ。」

「いつもお父さんが、読んでいるような本を、自分で読めるようになりたいんだ。だからお父さん、ぼくに文字を教えてください。」



むすこの金次郎に、文字の読み書きを教えてほしいと言われた父（利右衛門）はびっくりしました。金次郎の顔を見ると、その目はかがやいています。学問好きの父です。

（金次郎の言うことにうそはない。よし。どのていどまで教えられるかわからないが、できるかぎり教えてみよう。）

と、父は心に決めました。

けれども、父にはこまることが一つありました。それは、金次郎が5才の時、*酒匂川の大こう水により田畑がすべて流され、そのために、今はとてもまずしいくらしをしていたのです。勉強するには、文字の読み書きに使用できる手本や練習用の紙を買わなければなりません。しかし、それらを買うよゆうはとてもありませんでした。

文字を教えてとせがむ金次郎のために、父は自分で習字の手本を作ることにしました。使い古した紙のうらに文字を書き、手本としました。けれども、練習に使う紙がありません。考えに考えて、木

*酒匂川：かながわ神奈川県を流れる川。大雨がふると、水があふれ、人々を苦しめた。

で作った小さな手箱てばこすなに砂を入れ、その砂に指で文字を書いて手習いをさせることにしました。

そのような手箱の文字の練習であっても、金次郎はうれしくてたまりません。（なるほど、この字はこう読むのか。）さっそく父の手本を見て、指で書いてみました。指に力をこめて書くと、文字がくっきりとされるされていきます。金次郎は、目をかがやかせて言いました。

「お父さん、『河原』はどう書けばいいの。」

「『栢山』って、こういう字だったんだね。」

父は、金次郎の聞くことの一つ一つに、ていねいに答えました。その答え方は、いつも真けんでした。このころの父は、昼はあれた田畑をたがやし、夜はおそくまでなわをなうなどの夜なべ仕事をしていました。体はとてもつかれましたが、

金次郎に文字を教えることは、父の大きな楽しみとなっていたのでした。それは、

（ただ、がむしゃらにはたらくだけではだめだ。りっぱな人間になるには、学問をすることだ。今の二宮家には無用のもののように思えるが、そのうちにきっと学問が身を助けてくれるにちがいない。金次郎には、学問をしてりっぱな人間に育ってもらいたい。）とねがうようになったからです。

こうした父のねがいが、金次郎につたわらないはずがありません。

（もっとたくさん字をおぼえて、いろいろな本を読みたいな。）金次郎は、毎ばん欠かさず父と勉強しました。そして、新しい文字をおぼえていくことが金次郎のよろこびでした。

金次郎が11才になった時、父は、病気になってしまいました。病



【第1部】子どものころの金次郎

勤
勞

気の父に代わって、土手の改修工事かいしゅうなどの仕事に出た金次郎ですが、大人の中に入ってはたらくことは、おさない金次郎にとっては大へんなことでした。（お父さんは毎日こんなにきつい仕事をしていたんだ。）毎日家に帰ってくるころには、足こしがいたく、体もつかれはてていました。

父の代わりに母と弟たちの面どうを見ながら、大人の中で毎日はたらき勉強しつづけることはかんたんなことではありませんでした。しかし、くじけずにがんばることができたのは、父のねがいが、しっかりと金次郎に受けつがれていたからです。

金次郎のために一生けん命文字を覚えてくれたやさしい父のことを思うと、金次郎の勉強しようという意よくは、ますます強くなっていきました。（本は、ぼくにたくさんのことを教えてくれる。わからないことがわかる。できなかったことが、できるようになる。新しいことを学ぶっておもしろいな。）



来る日も、来る日も、せいっぱいはたらき、そしてどんなにつかれていても、夜おそくなっても、金次郎はよろこんで勉強しました。



なっとく 金次郎 ②

きんろう
勤勞とは、
どんな教えだろう。



一言で言えば「はたらく」ことだよ。そして「一つのことに真けん^{まけん}にさい後まで取り組む」ということだよ。「一生けん命はたらけば、人間は生きていくためにひつようなものを得ることができる。しかし、はたらかなければ、食べることにもこまるであろう。」目の前にあるやるべきことを一生けん命やることを金次郎さんは教えているんだよ。



チャレンジ 金次郎 ①

毎日、お手伝い^{てつだい}をしているよ。



みんなも勤勞にちょうせん!!

仕事が大へんでも
勉強しつづけた金次郎さん。
みんなも、金次郎さんのように
こつこつと毎日楽しく
つづけられるものを見つ
けよう!



金次郎さん 勤勞達成^{たっせい}

☆☆☆☆ 根気よくさい後まで
仕事をする。

☆☆☆ みんなのために仕事をする。

☆☆ 決められた仕事をきちんとする。

☆ 自分のことは、自分でする。



(2) 金次郎のわらじ

勤
勞

至
誠

推
讓

「うわあ、今年もこう水にやられてしまった。またみんなでおすとするか。」

金次郎が12才の時のことです。金次郎の住んでいる相模の国栢山村には酒匂川という川が流れていました。この川はとくべつ大きい川ではありませんが、よくこう水を起こして、近くの村に住む人々を苦しめていました。

「みなさん、ぼくも手伝わせてください。」

「よし、わかった。しっかりたのむぞ。」

金次郎は、病気のお父さんに代わって、子どもではただ一人、大人の中に入ってはたらきました。土や石を遠くから運んで来ては、土手につみあげるのです。それは、大人でも大へんほねのおれる仕事でした。ですから、12才の金次郎にとっては、それはそれは大仕事でした。

しかし、金次郎は、どんな大仕事でも弱音をはきませんでした。（病気で休んでいるお父さんの分までがんばろう。そして、早く土手をなおすんだ。）

ほかの人たちがひと休みしている間も、一人でせっせと仕事をつづけました。そんな金次郎の様子を見て、

「おおい、金ぼう、休めよ。無理をするなよ。」

「そんなにがんばると体をこわすぞ。お茶でも飲んでひと休みだ。」

と、村の人たちがいくらそうよびかけても、金次郎は、

「だいじょうぶです。先に休んでいてください。」

と言っは、重たい石や土を運ぶのでし



た。（みんなのはたらきにくらべたら、自分はまだまだだ。みんながひと休みしている間に、自分の足りない分を少しでもおぎなうために、はたらかなければ。）とっていました。村の人たちは、そのような金次郎の様子を見て、

「金ぼうはよくやるな。本当に感心な子だ。」
と、口々にほめました。

その日の夕方、村の人たちが帰ってしまったあと、金次郎は（村の人たちはみんな親切でよい人ばかりだ。どうしたら、もっと役に立てるのだろうか……。）と考えこんでいました。

家に帰った金次郎は、（村の人たちのわらじはすり切れていて、足がとてもいたそうだったな。新しいわらじがあれば、きっとよほどこんでもらえるだろう。）と思い、夕ごはんをすませるとすぐに土間まにおりて、わらをさがしました。

しかし、わらじをあみ始めた金次郎は、こまってしまいました。わらじの大きさをどのくらいにしたらよいのかわからないのです。そこで金次郎は、（仁平にへいさんの背せは、お父さんと同じくらいだったな。よし、お父さんのわらじと同じ大きさにして作ろう。熊吉くまきちさんは、背が少しひくいから、このくらいの大きさかな。）と、一人一人の村人を思いうかべながら、夜はおそくまで、何足もわらじをあみつづけました。

わらじができたよく朝、だれよりも早くかわらに行き、みんなに知られないように、あんだわらじを、ここに1足、あそこに1足とおきました。

ところが、わらじを見つけた村の人たちは、

「おや、わらじを落としていった人がいるぞ。きっと、こまって、あとからさがしに来るにちがいない。」
と言って、近くの木のえだにわらじを



【第1部】子どものころの金次郎

勤
勞

かけておくばかりでした。それを見た金次郎は、（せっかくあんだのに、どうして使ってくれないのだろう。）とがっかりしてしまいました。

至
誠

しかし、（村の人たちは、気のいい人ばかりだ。だれかが落としたわらじだと思って、自分の物にできなかったにちがいない。）とも思うのでした。

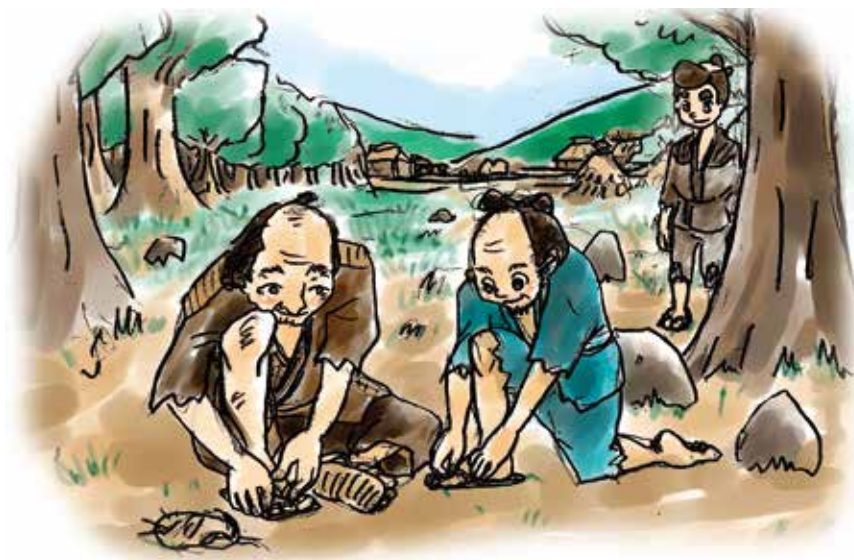
次の日の朝、今度はまるでだれかが捨てたように、わらじをばらばらにしておきました。すると今度はうまくいきました。わらじを見つけた村の人たちは、

推
讓

「おや。ここに、こんなに新しいわらじが投げ捨ててあるぞ。もったいないな。だれかが捨てた物ならはいてもかまわないだろう。」と言いながら、わらじをはきました。すると、とてもはきごちがよいのです。重い土や石を運んでいると、わらじはすり切れて、かわらの石が足にくいこんできます。そのいたさは、とてもがまんできるものではありません。はげしい仕事ですから、新しいわらじが何足もひつようです。しかし、昼間のつかれで、夜、自分のわらじをあむ時間はなかなかもてません。村の人たちの多くは、よびのわらじを持って仕事に行くことができずにいたところでした。

「こりゃあ、ありがたい。よし、これなら仕事もはかどるぞ。今日もがんばってはたらくとするか。」

金次郎は、そんな村の人たちの様子を見て、心がほっとして、にっこりするのです。





なせなせ 金次郎 ②

金次郎さんのことを
もっとくわしく
知ろう。



Q1

金次郎さんは、1787年に今の
神奈川県小田原市かながわ おだわらに生まれた
んだ。さて、金次郎さんは何才
まで生きた？

- A. 50才
- B. 60才
- C. 70才

昔の人は
何才ぐらいまで
生きたかな



Q2

金次郎さんは、お米をつきなが
らうすの周りをぐるりと回って
は本を読み勉強したんだ。さて、
それが理由でついたあだ名
はどれ？

- A. ぐるりいっぺん
- B. うすぐるり
- C. ぐるり金さん

うすの周りを
ぐるり…？



Q3

大人になった金次郎さんの身長
は何cm？

- A. 約146cm
- B. 約166cm
- C. 約186cm

しゃく すん
6尺2寸7
聞いたよ



Q4

金次郎さんが家を立て直し、
こつこつとためたお金いっせんが一干
文もん(今のお金で1,000万円)になっ
たときにしたことは何？

- A. 温泉旅行おんせんに行つて
ゆっくりした
- B. まずしい人たちにお金を
わけてあげた
- C. 大きな蔵くらにお米を集め
災害さいがいに備えたそな

金次郎さん
だからきっと…



答えはわかったかな？
もっとほかにも金次郎さんのことを
調べてみよう！



(3) まきをせおった金次郎

「ほれ、また金さんが通るよ。」

「農民が、あんなに大声出して本を読んで、いったい何になるんだい。」

「それに何もまきをせおって、歩きながら読むこともあるまいに。」

「いやいや、金ぼうは感心なはたらき者だよ。あんな子どもでも、お母さんと二人の弟のくらしを立てているんだから。」

今日も、いつものようにまきをせおって歩きながら、大声で本を読みながら通る金次郎を見て、村の人たちがうわさをしています。どんなうわさが聞こえようが、それによって金次郎が本を読むことをやめようとはしませんでした。それどころか、ますます真けんに読むようになりました。

金次郎が14才の時、長く病気でねていたお父さんがなくなりました。あとには、お母さんと金次郎、そして二人の弟がのこされました。

お父さんが病氣中に、金次郎の家の田畑のほとんどは、人手にわたってしまいました。ですから、今では金次郎の家は、村中に知れわたるほどひどいびんぼうになっていました。そのうえ、金次郎は、お母さんを助けて、二人の弟を育てなければなりません。

「お母さん、安心してください。わたしが一生けん命はたらきます。」

人手にわたった田畑を、もと通り買
いもどしましょう。」

と金次郎は、お母さんと約束して、今まで以上の努力を始めました。朝早くから田んぼに行って、こう水で流れてきたどろや石を取りのぞき、よい田になおし、夜は夜でなわをない、わらじを作って売り、くらしを立てました。



しかし、そのくらいのがんばりでは、とても間に合いません。そこで金次郎は、朝うす暗いうちに起きて、4キロメートルもはなれた山へたきぎとりに出かけ、それを町へ売りに行くことを始めました。金次郎が、大きなまきのたばをせおって通ると、村の人の中には、



「おい、見ろ、見ろ。ぼろ金さんのお通りだ。」

などと、ひやかす人もいました。なるほど、金次郎の着物は、ほころびはぬってありますが、もとのぬのがかくれるほど大きな*当てぬのがしてありました。家がびんぼうになってからは、村の人たちもつめたい目で見るとなりました。それでも金次郎は、歯をくいしばってがまんしました。そして（今にみている。自分の家をきつと、もと通りにしてやる。）と、心にかたくちかうのでした。さらに金次郎は、（どうすれば、田畑をもと通りに買いもどすことができるんだろう。）と、真けんを考えました。

もともと、読書が大好きだった金次郎は、本を読むとそれだけ自分の心が広がっていくように思えました。それにえらい人の教えも、だんだんわかって、おもしろく思うようになってきたのです。（そうだ。田畑を買いもどすには、ただはたらくだけではだめだ。学問もしなければ。）と考えつきました。

ところが、金次郎にはこまったことがありました。たきぎとりを始めてからは、どうしても早く起きなければなりません。そうすると、これまで夜なべのあと、おそくまでつづけていた読書ができないのです。金次郎は、その時間をどこで生み出そうかと考えました。（そうだ。いいことがある。家から山までの道を歩くのに1時間、往復おうふくすれば2時間、それを1日に2回やれば4時間もある。その時間に勉強すればいいんだ）

*当てぬの：やぶれたところに当ててぬったぬの。

【第1部】子どものころの金次郎

勤
勞

至
誠

こうして金次郎は、まきをせおって歩きながら読書をするようになりました。「大学」や「論語」という漢字だけで書かれた中国の大へんむずかしい本です。1回や2回読んだだけでは、とても意味がわかりません。そんな時は、歩きながら大声を出して何度も読みました。わけを知らない村の人たちは、金次郎のこの様子を見て、金次郎は気がちがったのではないかと思いました。

「かわいそうに。あんまりびんぼうで苦労したから、ぼろ金さんは、頭がへんになってしまったらしい。」

といううわさが広まりました。しかし、金次郎はそれに負けないで、ますます勉強にうちこみました。

金次郎は、何も好きこのんでまきをせおいながら勉強したわけではありません。そのころの金次郎にとって、この時が一番勉強できる時間だったのです。本読みに夢中になればなるほど、まきの重さも気になりませんでした。

今日も、人のうわさや悪口など気にもかけないで、重いまきをせおった金次郎の本読みの声が、村中にひびきわたります。





なっとく
金次郎 ③

至誠とは、
どんな教えだろう。



一言で言えば「真心」のことだよ。何事に対しても、真っすぐな心で思いやりをもって行動することが大事なんだ。至誠をもって人や自然にせっしていれば、そのやさしさが自分のもとに返ってくるんだよ。当たり前のようにある食べ物や水、そして周りの人のささえに感謝する心をわすれないでいようね。

「ありがとう」って言われると、
心があたたかくなるね。だれかがよろこんで
くれるとうれしいね!



チャレンジ
金次郎 ②

トイレのスリッパが
いつもきれいになっているわ。
だれがしてくれて
いるのかな。



みんなも至誠にちょうせん!!

至誠とは、何事にも
真心をもって取り組むこと。
村の人のことを思って、
わらじを作った金次郎さんのように、
人がうれしい、助かると
思えることをしよう!



金次郎さん 至誠達成

☆☆☆☆ どんな人、生き物、
物事に対しても真心
をもってせつする。

☆☆☆ 真心をもってどんな人にも
やさしくする。

☆☆ 相手の気持ちを大切にする。

☆ 「ありがとう」「ごめんなさい」が言える。



(4) わたしの油

金次郎が16才の時のことです。

「酒匂川の土手がくずれるぞ。」

「また、こう水になるぞ。」

村々には*半鐘が鳴りわたりました。

外は真っ暗、どしゃぶりの雨です。

次の朝、金次郎は、自分の家の田んぼの前で、ぼう然と立ちつくしていました。

お父さんがなくなって2年後、お母さんまでもが病にたおれ、なくなってしまいました。両親をなくし、さい後にのこったわずかばかりの田んぼも、やっと田植えを終えたばかりだというのに、全くのあれ地となってしまいました。（ああ、なんでわたしにはこんな不幸ばかりつづくのだろう。せめてこの田んぼだけでものこっていたら……。これで本当の*無一文になってしまった。）金次郎の目から、なみだがとめどもなく流れ落ちました。

くらしにこまった兄弟三人は、住みなれた家を出て、はなればなれにくらすしかありませんでした。小さな第二人は母の生まれた実家に、金次郎は万兵衛おじさんの所へあずけられることになりました。

家をはなれる時、金次郎は、何度もわが家をふり返りながら、（のこっているものはもう自分のじょうぶな体しかない。いつかまたきつと、第二人をよびもどし、あの家で三人仲よくくらすのだ。そのためには、万兵衛おじさんの所で、一生けん命はたらくしかない。）と強く心にちかいました。

万兵衛おじさんの家に引きとられた金次郎は、そこに住んでいた万兵衛おじさんの妹の子、円蔵とともに、昼は田や畑をたがやし、



*半鐘：火の見やぐらの上などにつり下げ、火災などのけいほうとして鳴らすつり鐘。

*無一文：お金などをまったく持っていないこと。

夜はなわをない、わらじを作り、おじさんの家の仕事を一日中手伝いました。このように、毎日毎日一生けん命はたらいていましたが、なぜか今のくらしに満足できませんでした。

「このままでは、ぼくのねがいはかなえられない。二宮家をもとのようにりっぱな家に立て直すことも、ぼくがりっぱな人間になることもできない。やっぱり、もっと勉強しなければ。」

そうつぶやいた金次郎は、その夜から、仕事をやり終え、おじさんがねるのを待って、勉強するようにしました。円蔵も金次郎の熱心さがわかり、おじさんがねむったのを教えるなど、協力するようになりました。

しかし、しばらくして、このことがおじさんにわかってしまいました。

「農民が勉強をしたって、何の役に立つか。勉強なんかできても仕方がない。のら仕事が一人前にできればいいんだ。本を読むのに高い油を使われるのもこまる。家に油がありあまっているわけではないのだ。」

金次郎は、したがうしかありません。仕方なく、おじさんの言うとおりに

しましたが、勉強をあきらめることができず、どうしたら勉強ができるか考えていました。ある日の夜のこと、円蔵が来て、金次郎に言いました。

「農民が本を読んでも役に立ちませんよ。」

「なぜ本が役に立たないんだ。おじさんにそう言われたのですか。」

「そうです。『本を読む前に、もっと学ばなければならないことがある。空の雲や水の流れ、土にまいた種が育つすがたを見れば、命のすばらしさや不思議さを学ぶことができる。』と、おじさん



が言っていましたよ。」

金次郎は、あの万兵衛おじさんが本当にそんなことを言ったのか信じられませんでした。

それから金次郎は、明かりがもれないように、*あんどんに着物をかけて本を読むことを考えつきました。



しかし、この方法も、すぐにおじさんに見つかってしまいました。

「また本を読んでいるのか。わしの言うことが、聞けないのか。」と、おじさんは本当におこってしまいました。

「おまえの世話をするために、よぶんなお金を使っているんだ。そのおんをわすれて、高い油をむだに使うとは何事だ。そんなひまがあったら、なわでもなっていればいいんだ。」

「はい、もう本は読みません……。」

仕方なく勉強をしない約束をした金次郎ですが、一人になると、また勉強をしたくなりました。次の日も、また次の日も、畑をたがやしながら考えていました。（勉強をしたいなあ。でもぼくが勉強ができる時間は夜だけだ……。これ以上おじさんにめいわくはかけられないし。自由に使える明かりがほしいなあ……。そうだ。ぼくが自分で油を作ればいいんだ。そうすれば好きなだけ勉強ができるぞ。よし、作ってみよう。）よい考えがうかんだ金次郎は、にっこりとうなずきました。

油がとれるアブラナをどこに植えるか考えた金次郎は、次の日、いつものように畑の仕事を終えた帰り道、こう水のあとの川べりへ行ってみました。すると、ほとんどがあれ地になり、石ころだらけで、草もいっぱい生えています。これでは、すぐにアブラナの種をまくわけにはいきません。

どうしても自分で油を作って勉強したい金次郎は、それからとい

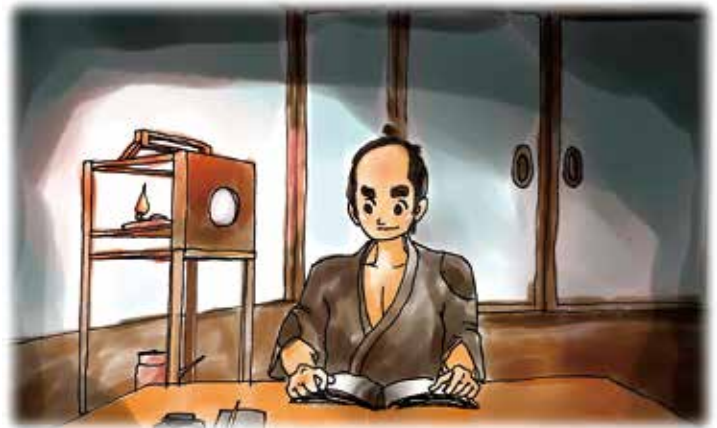
*あんどん：木や竹のわくに紙をはり、中に火をともした昔の明かり。

うもの、おじさんの家の仕事が終わると、大へんつかれていましたが、そのあれ地によって、暗くなるまで、石をどけたり草をとったりしました。今の金次郎にとって、勉強が一番大切なものでした。そのために、油はどうしてもひつようだったのです。金次郎は、おじさんの家の仕事も手をぬかずきちんとやり、あれ地の*開こんもやり通したのです。

なんとかアブラナを植えてからも、仕事の帰りによっては、一生けん命世話をつづけたので、やがて芽^めが出て、春になると、黄色の花をさかせました。その花の上を、モンシロチョウが金次郎の心を表すかのようにとんでいました。

とれたアブラナの種は、全部でおけに3ばいもありました。手ですくってみると、細かいつぶがさらさらと気持ちよく、指の間をこぼれていきます。

金次郎は、さっそくとれた種の内からかりた分を返すと、のこりを油屋で油にしてもらいました。その帰り道、油の入った*とっくりを大事にかかえて、金次郎は、何度もつぶやきました。



「これは、わたしの油なんだ。これで好きなだけ勉強ができるぞ。」

その夜、さっそく、自分で作った油で明かりをつけました。すると、あんどの明かりがいつもより明るく感じられ、むずかしい文も心にしみこんでくるように感じられました。

こうして、金次郎は、また、勉強を始めたのです。

*開こん：あれ地をきり開いて田畑にすること。

*とっくり：細長く、口のせまい、酒や油を入れるつぼ。

(5) 捨^すて^{なえ}苗

いつものようにおじさんの家の田んぼ仕事を終えての帰り道、金次郎は、ふとあぜ道に目を向けました。そこには、もういらなくなった稲^{いね}の苗が捨てててありました。よく見ると、あちらこちらにたくさんの苗が捨ててあるではありませんか。それを見た金次郎の目がキラリと光りました。（これはもったいない。この苗にだってまだ命があるはずだ。大事に育てれば、お米がとれるようになるかもしれない。そうだ、さっそく植えてみよう。）そう思った金次郎は1本1本^{むちゅう}夢中になって拾いました。

ちょうどそこへ、仕事帰りの村人が通りかかりました。

「金次郎、そんな苗を拾って何にするんだい。去年のこう水で、お前の家の田んぼは、使いものにならなくなったではないか。どこへ植えるのかね。」

「そんなことしているひまがあったら、早く^{まんべえ}万兵衛さんの家に帰って、夜なべ仕事をした方が、お前さんのためになると思うがなあ。」

二人の村人は、金次郎に言いたいだけ言うと、わらいながら行ってしまいました。金次郎はくやしさとはずかしさで顔を真っ赤にし、うつ向いていましたが、拾った苗はしっかりとだきしめていました。たとえ村人にからかわれても、金次郎の強い思いはそんなにかんたんにかわるものではありません。苗をだきしめたまま、金次郎は、川の近くにある自分の家の田んぼへ走って行きました。

拾った苗をすぐに植えることができるように、それから毎日草か



りをしたり、大きな石ころを出したりして、やっとのことで※30坪^{つぼ}ほどの小さな田んぼができました。それでもまだ石ころがごろごろしていて、とてもりっぱな田んぼとは言えないほどのものでしたが、金次郎にとっては、この上もないよろこびでした。

田んぼに水を入れると、苗1本1本に、

「かれないで、じょうぶに育ておくれ。」

と話しかけながら、いのるような気持ちで植えました。やっと植え終わった時、体中どろだらけでしたが、体に熱^{あつ}い力がみなぎってくるように思えました。それからは、雨の日も、風の日も、苗を育てる金次郎のすがたを田んぼで見かけない日はありませんでした。金次郎の努力^{どりよく}はだれにも負けないものでした。

秋になりました。金次郎の小さな田んぼも、重そうに頭をたらししている黄金色^{こがね}の稲穂^{いなほ}でいっぱいになりました。

「おお。これはすごい。」

うれしそうに稲穂を見る金次郎の後ろから、声が聞こえました。そこには、万兵衛おじさんが立っていました。

「こやしがたりないと思ったが、なかなかいいできだな。もっともおれも2、3度入れてやったがな。」

「えっ……。おじさんがこやしを入れてくれたんですか。」

「ああ。ちっとばかりな。」

でもおまえの毎日の世話がよかったんだよ。おまえの努力のおかげだ。」

稲穂を見つめる金次郎のほおには、ひとすじのなみだが光っていました。

「捨ててあった苗から、こんなにもゆたかな実りを手にすることが



※30坪：約1^{やく}アール(10m×10m)。教室ほどの広さ。

できた。捨て^す苗^{なえ}にも命があったのだ。捨て苗が、わたしに大切なことを教えてくれた。おじさんの言っていたのは、こういうことなんだ。」

金次郎は、稲穂^{いなほ}をやさしくなでながらつぶやきました。金次郎は、前に円蔵^{えんぞう}に聞いた、本を読まなくても自然^{しぜん}から学べることもあるという、おじさんの話を思い出していたのです。

稲かりをしてみると、なんと*1俵^{びょう}もの米がとれました。金次郎は、この1俵をもとにして田を広げ、次の年には5俵、2年後には20俵ものしゅうかくをするまでになったのです。

そして、ついに金次郎は自分の家に帰ることができました。弟二人もよびもどし、もとの暮らしにもどることができたのです。金次郎の家から兄弟三人の楽しそうな笑い声が聞こえてきます。



なっとく 金次郎 ④

せきしょう い だい
積小為大って、
どんな教えだろう。



小さな努力^{どりょく}をこつこつと積み重ねていけば、いずれはすばらしいけっかにむすびつくという教えなんだ。

捨てられた苗の1本1本をこつこつと大切に育てたけっか、金次郎さんは1俵の米をしゅうかくし、そして、さらに5俵、20俵とふやしていったんだよ。小さいことでも、ねばり強くつづけていくことが、大きな成果^{せいこう}を手にするにつながるんだよ。



* 1俵^{やく}：約60キログラム

金次郎物語

【第2部】大人になった金次郎



大人になった金次郎さんは、多くのあれはてた町や村を立て直したんだよ。金次郎さんの教えに、さいしょは耳をかさなかった人たちも、その人がらや熱心さに心を打たれて、だんだん協力するようになっていくんだよ。



金次郎さんは、どんな教えをみんなに広めたのかな。きっとさいしょはうまくいかなかったんじゃないかなあ。そんな苦労した話ものっているのかな。

町や村の立て直しがせいこうしたときは、みんなでよろこんだんだろうね。金次郎さんって、神様みたいな人かもしれないね。



(6) 服部家の立て直し

服部十郎兵衛は、小田原藩に仕え、家老という重要な役目についていました。当時さむらいは、との様から*俸禄をもらってくらしていました。十郎兵衛は家老という役職でしたので、多くの俸禄をもらっていました。しかしこのころは、どの藩でもざいせいが苦しくなったため、十郎兵衛の俸禄は、今までの約三分の一になってしまいました。しかし、服部家では、俸禄がへっても、生活をかえることなく、りっぱなきぬの着物を着て、ぜいたくなものを食べていました。そのため、ついに*250両もの借金ができてしまいました。

たくさんの借金をかかえた十郎兵衛は、大へんこまりました。そんな時二宮金次郎のことを思い出しました。金次郎はびんぼうのどんどこから、ちえと努力で家を建て直し、今では、村の中でもゆたかな暮らしをしているというのです。金次郎はこのとき32才でした。

十郎兵衛は、さっそく金次郎に、

「服部家のくらしむきが、きちんとしていくようにしてほしい。」と、何回もたのみました。金次郎は、十郎兵衛のたのみをことわることができず、とうとう引き受けることにしました。十郎兵衛は、とてもよろこび、立て直しのすべてを金次郎にまかせました。

服部家にのりこんだ金次郎は、おそれながらと十郎兵衛に言いました。



*俸禄：給料のこと。

*250両：今のお金にすると、約2,500万円。

「たくさんの借金をして、それを返そうともせず、ただこまった、こまったというだけで、何もしないで毎日をすごしているとは、とんでもないことです。これからは、今までのようなくらしはやめることです。食べる物はごはんとするものだけ、着物はもめんだけとして、きぬは着てはいけません。むだな遊びはいっさいやめ、お酒もひかえてください。これから何年間かこうした生活をしていけば、やがて借金を返すことができるはずですよ。生活を立て直すには、これくらいのがまんのくらしがひつようです。」

十郎兵衛は、金次郎のこの話を聞いて、まったくそのとおりでと思いました。その日から、十郎兵衛は金次郎の立てた計画けいかくにしたがって、しめされたとおりのくらし方をしていく決心をしました。しかし実行することは、かんたんではありませんでした。

お金は、みんなが生活していくのにぜったい欠かせないことだけに使いました。食べ物やまきは1日に使う量りょうを決め、着物はもめん以外は使わず、やぶけたら当てぬのをして使うなど、つつましい生活が始まりました。十郎兵衛は、毎日、新しい生活をなんとか実行していきました。しかし、しばらくすると、前に着ていたりっぱなきぬの着物をどうしても着たくなってしまいました。

(鳥と花のもようが入ったきぬの着物は、あたたかくてよかった。それに道を歩いていると、みんながうらやましそうに見たものだが……。)すると、とつぜん、金次郎のきびしい顔がうかびました。

「朝に夕に、心の中でよいことばかり思っている、自分がりっぱになれるとはかぎりません。よいことだと思ったことを実行しなければ、その人を本当によい人だとは言えません。悪いことをし



【第2部】大人になった金次郎

た時、（悪いことをしたなあ。）と思うだけではだめで、あらためなければどうにもなりません。書物を読んでも、その教えを実行しない人は、くわを買ってもたがやさないのと同じです。たがやさないのなら、どうしてくわを買うひつようがありません。世の中のことは、自分が努力し、実行しなければ、何事もできないのです。」

つつましい生活にがまんできなくなると、十郎兵衛は、金次郎の言葉^{じゅうろう べ え}をくり返しくり返しつぶやきました。そして、金次郎の書いた服部家^{はつ どり}立て直しのための『生活の約束^{やく そく}』を読んで、ゆっくりうなずくのでした。

1年がすぎました。生活費^ひを計算している十郎兵衛の顔が、だんだんかがやいてきました。借金^{しゃっ ぎん}の一部を返せるだけのお金^{お かね}ができています。十郎兵衛は、きぬの着物を着たくなかったあの日を思い出し、にがわらいをしました。

「はでなくらしをやめてよかった。これからも、この生活をつづけよう。」

十郎兵衛はつぶやきました。今、金次郎の言葉の意味がやっとわかったのでした。

その後、服部家の借金は、年ごとにへり、5年たった時には、とうとう全部の借金を返すことができました。それどころか、貯金^{ちよ ぎん}さえもできていたのです。





なっとく 金次郎 ⑤

分度とは、
どんな教えだろう。



一言で言えば「せのびせず、自分で考え、自分にふさわしい生活をする」ことだよ。

人には、決まったしゅう入がある。「それぞれの人が、自分に合った生活を送ることが大切である。」と、金次郎さんは教えているんだよ。

分度



チャレンジ 金次郎 ③

もらったお年玉も、
まずはちょ金して、
よく考えてから
つかうわ。



みんなも、分度にちょうせん!
おこづかいの使い方は、どうかな。
計画的けいかくてきに使っているかな。



金次郎さん 分度達成

☆☆☆☆ 自分にあった目ひょうや
決まりをつくって計画的
にすごす。

☆☆☆ せつやく
節約をする。

☆☆ むだづかいをしない。

☆ ものを大切に使う。

(7) 岸右衛門

服部家の立て直しをせいこうさせた金次郎は、小田原藩主の大久保忠真から*桜町の立て直しをたのまれました。あまりの大仕事に、さいしょはことわっていた金次郎でしたが、との様から、

「お前でなければ、この仕事はできない。ぜひやってくれ。」

と、何度もたのまれました。（との様から、これほどまでに言っただき、引き受けないわけにはいかない。農民のくらしがよくなる仕事なら、自分の家のことをぎせいにしても、なくなったお父さん、お母さんも、よろこんでくれるだろう。）と考えるようになりました。桜町の立て直しを決心したのは、金次郎37才の時のことでした。

金次郎は、自分の家や田畑を売りはらい、家族とともに桜町にうつり住み、あれはてた町の立て直しにとりかかりました。

金次郎の指導は大へんきびしいものでしたから、それについていけない人もたくさんいました。物井村の岸右衛門もその一人で、金次郎の桜町の立て直しに反対し、悪口を言ったり、じゃまをしたりしていました。

しかし、7年がたつうちに、桜町全体の立て直しがうまく進むようになると、金次郎に協力する人がふえてきました。そうなると、岸右衛門はあわて出しました。岸右衛門は金次郎のところへ行って、協力を申し出ることになりました。

金次郎は、岸右衛門が今までしてきたことには何も言わないで、「岸右衛門さん、ありがとう。ぜひ、おねがいしますよ。」と言うだけでした。この言葉を聞いて、岸右衛門は、（あんなに金次郎さんに悪いことをしたのに、わたしをゆるしてくれるのか。）と思いました。金次郎の心の広さがわかり、今までの自分の行動

*桜町：今の栃木県真岡市。江戸時代は、小田原藩の土地だった。
物井村、横田村、東沼村を合わせて、桜町とっていた。

を深く反省はんせいしました。そして、村のために、はたらこうと決心しました。

その日から、岸右衛門は、村人の先頭に立ってはたらきました。けれども、村人たちは、だれ一人そんな岸右衛門についてきません。岸右衛門が、今まで桜町の立て直しに協力するどころか、じゃまばかりしていたことを知っていたからです。岸右衛門は、村人たちのたいどに、はらをたてて、金次郎にぐちをこぼしました。

「わたしは、昔は金次郎先生のなさることに反対して、悪口を言いふらしていましたが、今では一生けん命はたらいています。それなのに、村の人たちは、今のわたしの本当の気持ちをわかってくれません。」

金次郎はしばらく考えていましたが、やがて話し出しました。

「7年もの間、この仕事に反対していたあなたが、急に協力し出しても、みんなが信じてくれないのは当たり前です。あなたの気持ちを村の人たちにみとめてもらうには、みんなのためになる大きなことをしなければ無理むりですね。」

「それでは、わたしはどうすればよいのでしょうか。」

「あなたの家のざいさんを全部、村のために使ってごらんなさい。あなたは、今まで自分のりえきになることしか考えませんでした。自分のよくを捨すてて、村のために力をつくすことほど、すばらしいことはありません。今こそ、物井村のために、はたらくのです。そうすれば、村の人たちも、あなたをかならず信用しんようします。」

それを聞いて、岸右衛門の顔色が変わりました。ざいさんを投げ出せば無一文むいちもんになってしまいます。

家族のくらしはどうなってしまおうでしょう。考えれば考えるほどまよってしまえばかりでした。

しばらく時間をおいて、金次郎はふたたび言いました。



勤
勞

「あなたが決心できないのは、家族のことを考えているからでしょう。」

「はい、わたし一人だけなら何とでもなりますが、家族のくらしが心配なのです。」

「心配いりません。ざいさんを投げ出して村のためにつくそうという人を、どうしてわたしが見ごろしにするものですか。家族のことは、わたしにまかせなさい。」

この言葉を聞いて、岸右衛門は、やっと決心がつかしました。

「お言葉にしたがいます。桜町の立て直しのお手伝いをさせてください。」

岸右衛門は反対する家族をせっとくし、家も田畑も売りはらって、そのお金を金次郎のところに持ってきました。

金次郎は、よろこんでそのお金を受け取り、桜町の立て直しのために使いました。

一方、岸右衛門には、あれ地の開こんをすすめました。岸右衛門とその家族は、一生けん命はたらきました。金次郎も、人をやとって岸右衛門一家の手伝いをさせました。こうして、多くの田が、新しく開かれました。

「岸右衛門さんのおかげで、こんなにりっぱな田んぼができました。今日から、この田んぼは、あなたのものですよ。」

こうして、岸右衛門は、前よりも広い田を自分のものとすることができました。しかし、岸右衛門にとって、もっとうれしいことがありました。それは、村の人たちに、心から信頼されるようになったことです。





なっとく 金次郎 ⑥

すいじょう
推譲とは、どんな
教えだろう。



一言で言えば「ゆずる」ことだよ。「人間は、ゆずり合うことで、はじめて人間らしい生活ができる。」と、金次郎さんは言ったんだよ。さらに、「推譲の心が、人間に平和と幸せをもたらす。人間と動物のちがいは、ゆずるという気持ちがあるかないかである。」と教えたんだ。



チャレンジ 金次郎 ④

みんなも、
推譲にちょうせん!
こんなことから
始めてみよう。



ブランコをゆずる



すれちがったときに
道をゆずる

ボランティア活動で
力をかす



電車やバスで
せき
席をゆずる



わたしがふだん
やってることも
推譲だったんだ。



(8) 木の根ほり

45才になった金次郎が進めた物井村の開こんは、岸右衛門さんに協力してもらいましたが、大へんな苦勞がありました。それは、この土地が70年以上もの間、あれたままになっていて、大きな木が森のようにしげっていたのを田畑にかえる仕事だったからです。

そのころの開こんの道具といえば、くわやすき、のこぎりが主だったので、作業には大ぜいの人手がいります。村の人だけではとてもできません。そこで金次郎は、よその村々から大ぜいの人をやとって仕事を始めました。

はたらきに来ている人たちは、体も大きく力自まんのわか者がほとんどです。その中に、*常陸国笠間村からはたらきに来ているおじいさんがいました。おじいさんは、（元気なわか者たちと同じようにはとてもはたらけそうもない。これから先、どうしたものか。）と、心配になりました。もともと開こんの仕事は、老人にはきつすぎます。どんなにがんばっても、わかい人の半分くらいしかできません。

いよいよ開こんが始まりました。わかい人たちは、自分のはたらきぶりを役人にみとめてもらおうと、先をあらそうようにできるだけ土がやわらかく大きな木の根が少ない場所をえらんで開こんしていきました。

しかし、おじいさんは、
「わたしが役に立つ仕事はこれだ。」

と、わか者がのこした大きな木



*常陸国：今の茨城県

の根をほり始めました。太い根っこは、四方に広がり、地中深くのびています。おじいさんがどんなにがんばっても、人目につくよう進む仕事ではありません。開こんを見て回る役人の中には、

「何だ！このおいぼれは。ほかの者の半分も仕事ができないではないか。」

と、しかりつける者もいました。けれど、おじいさんは、決して楽な仕事にまわろうとはしませんでした。（わたしのような年よりがはたらかせてもらえるだけでもありがたい。その上、わか者と同じようにお金がいただける。それなら、自分が一番お役に立つ仕事をしなければ申しわけない。）と、朝から夕方まで休み時間にもこつこつと木の根ほりをつづけました。

そんなおじいさんに、金次郎は、

「休み時間ぐらいは、ゆっくり休みなさい。」

と、声をかけました。

「はい、ありがとうございます。でも、ごらんのような年よりで力がございません。みなさんといっしょに休んでいたら、みなさんの半分も仕事できませんから。」

と言って、休もうとはしませんでした。

時間こそかかりましたが、おじいさんのはたらきで、大きな木の根も一つずつかたづいていきました。

何か月もかかって、やっと開こんが終わりました。役所では、よそからはたらきに来てくれた

人々にお金をはらって、自分たちの村へ帰すことになりました。

その日、金次郎は、おじいさんをとくべつによびました。金次郎によばれたおじいさんは、（もしかしたら、自分はほかの人の半分



もはたらけなかったことをしかられ、お金をはらってもらえないかもしれない。) と思って、おそろおそろ金次郎の前へ出ました。

すると、金次郎はやさしい声で、

「おじいさん、長い間ご苦勞くろうだったね。かげ日なたなくはたらいてくれたごほうびだ。」

と、15両りょうのお金をおじいさんにさし出しました。しかし、

「とんでもないことです。みなさんと同じお金をいただくのさえもつたいないのに、こんな大金をいただければ、ばちが当たります。」

と言って、おじいさんは受け取ろうとはしませんでした。すると金次郎は、おじいさんにこう話しました。

「遠りよすることはない。わたしは何か月もの間、お前さんのはたらきぶりを見てきた。やった仕事の量りょうは、わかい者の半分ほどかもしれない。しかし、お前さんは、人のいやがる仕事を見つけては、そこではたらきつづけた。決して楽な仕事をしようとはしなかった。人間、年がちがえばはたらく量もちがってくるのは当たり前だ。しかし、人間の心は、老人もわか者もちがいがあってはならないはずだ。人が見ていようがいまいが、自分のつとめを全力でやることは、人間としてまことにりっぱなことだ。」

金次郎の話に、おじいさんはなみだを流して聞き入りました。おじいさんには、えがおでやさしく話す金次郎のすがたが、かがやいて見えました。



なっとく
金次郎 ⑦

てん どう じん どう
「天道・人道」ってどんなことだろう。

金次郎さんは、人間と自然との
かわりについても
教えてくれているね。

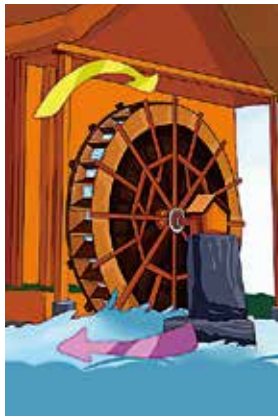


金次郎さんは、多くの村の立て直しや土地の開こんをするときに、人々に「天道・人道説」を伝え、せつとくしました。「天道」は自然、「人道」は人間のことで、開こんは自然と戦って、人（人道）のものにすることですが、どこを開こんするかは、その自然（天道）をよく知らなければいけません。金次郎さんは、その土地のかこの災害や気候のへん化などをくわしく調べることから始め、



「ここは川がすぐ近くにあるから、田んぼに水を引きやすいよ。」
「あそこは地しんがおきたら津波がくるからだめだ。」
「むこうは南に向いていて日がよく当たるから、作物の育ちがいいよ。」
のように話し、みんなで力を合わせて開こんを進めていきました。

また、金次郎さんののこした言葉に『**自然にしたがい、自然にさからえ**』もあります。金次郎さんは、村人たちに水車をながめながら、次のような話をし、人間と自然の関係をわかりやすく伝えました。



水車は、下半分は水の中に入っていて、水の流れと同じ方向に回っている。でも、上半分は、水の上に出て、水の流れと反対に回っている。人の生き方もこうでなければいけないよ。田んぼや畑にざっ草が生えるのは自然だが、その自然にさからって草取りしたり、害虫をやっつけたりして作物を育てるように、半分は自然にしたがい、半分は自然にさからって努力することが大切なんだよ。



動物は、自然の中で自然のまま生きているけれど、人間は、時には自然と戦わなければならないときもあるんだね。地震・台風・雷など自然はすごい力をもっているけれど、それらから上手に人間を守ることを金次郎さんは教えてくれていたんだね。



チャレンジ 金次郎⑤

金次郎の カルタをつくろう



お話を読んで
金次郎さんのことが
いろいろわかったね。
大切な教えが
たくさんあったね。

わかったことを
カルタにしてみたいな。
さっそく作ってみよう!!



金次郎
自分のことより
みんなのために

あかりが
ほしくて
アブラナ育てる

あ



き



わ



わらじを作って
みんなにあげる
金次郎

どんなお話
だったかな…。



◎文字と絵カードを作ろう。

文字カード …お話に出てきた大事なことばや
教えをもとに書こう。

絵カード …イラストをかこう

◎みんなで遊んでみよう!!



掛川市に広がった金次郎の教え



大日本報徳社

こんなにりっぱな金次郎さんの教えを掛川に広めた人たちがいたんだよ。その教えを報徳ほうとくと言うんだよ。その人たちのはたらきで、掛川に報徳の心が根づいたんだね。だから、今でもいろいろな所にたくさん金次郎さんの像があるんだよ。



すごいなあ。どんな人たちかな。上手に教えたから、どんどん広まったんだね。金次郎さんと掛川のつながりがこれでわかりそうだ。

その人たちについて調べてみたいわ。わたしのまわりでも報徳ってことばをよく見たり聞いたりするけれど、これも金次郎さんかんけいに関係があったのね。



(1) 岡田良一郎と冀北学舎

夜明けまで、まだかなりの時間があります。つめたい風がはだをさすようにふきぬけていく、寒い冬の朝のことです。今朝もまた、きびしさの中にも温かみのある先生の声が*寄宿舍内にひびきます。

「みなさん、4時になります。起きる時こくです。さあ、起きましょう。」

先生がよく通る声に、学生たちは、全員がさっと起きました。外は、真っ暗です。

「先生、おはようございます。」

「はい、おはようございます。みんな元気に起きましたね。さあ、今日も一日がんばって勉強しましょう。」

これは、掛川の町の中心より、北に10キロメートルほどはなれた倉真地区にたつ冀北学舎での朝のひとつです。学生たちに起しよをよびかけていた先生は、この冀北学舎をつくった岡田良一郎でした。

良一郎は、16才の時、二宮金次郎の門下生となり、4年間にわたって、漢学、経済学、地いきの開発の仕方、人の生き方などの教えを受けました。わずか4年間の勉学でしたが、良一郎は、人の心を考えることの大切さや、地いきをゆたかにするにはどうすればよいのかを、深く考えるようになりました。そして、金次郎がよく口にした、「教育は、社会をつくる。」という言葉思い出し、1877年（明治10）10月、英語と漢学を教えるじゅくを倉真に開きました。

ある日、一人の学生が、



岡田良一郎

*寄宿舍：学生たちがねとまりするたてもの

「先生、このじゅくのことを『英学校』とよんでいます、もっとすてきな名前をつけませんか。」

と話しかけました。すると良一郎は、しばらく考えこんでいましたが、とつぜん、

「そうだ、『冀北学舎』と名づけよう。」

と、力強く答えました。

「冀北学舎ですか。いったい、どんな意味ですか。」

「冀北というのは中国の名馬の産地さんちの名前だ。その冀北のように、ゆうしゅうな人材じんざいを世に送り出すのが、ここ冀北学舎の役わりというわけだ。」

と、説明をしました。するとその学生は、

「先生、わかりました。わたしは一生けん命勉強し、冀北学舎の名前に負けないよう、真心をもって人や物につくし、日本を動かすリーダーとなります。」

と力強く言いました。

冀北学舎は、当時としては、とても進んだ学問を勉強できるじゅくとあって、人々の関心かんしんは高く、

「わたしも、このじゅくで勉強させてください。」

「おねがいします。わたしにも勉強を教えてください。」

と、言っいては、地元の人たちはもちろんのこと、遠くは鹿児島県かごしまや茨城県いばらきからも学生たちが集まって来ました。そして、1881年（明治14）には、全国から58名も集まりました。

良一郎の教えは、きびしいものでした。夏でも冬でも、朝4時に起しようし、明るくなるまでの間はランプの明かりで読書をさせました。夜が明けると、舎内のふきそうじ、草とり、道路のそうじを行わせ、それらが終わるとようやく朝食にす



るという朝の生活をつづけさせました。

中でも、学生たちがもっともいやがったのは、^{べんじょ}便所そうじでした。学生のはほとんどは金持ちの家庭に育ち、自分の家ではそうじなどしたことがありませんでした。ましてや、便所そうじなどはじめてのけいけんでした。学生の中には、

「なぜ、わたしが便所そうじをしなければならないのですか。」

と、良一郎にもんくを言う者もありました。しかし、良一郎はそんな学生に対して、

「便所はみんなが使うところです。その便所をきれいにすれば、みんながよろこぶでしょう。みんなによろこばれて、あなたもうれしく感じることはできるはずです。」

と話して聞かせました。やがて学生たちは、みんなの便所だということで、たがいにきれいにそうじするように心がけ、便所そうじ当番をそれほど苦にしないようになりました。

こうして学生たちは、良一郎のもつ^{いだい}偉大な力に引きつけられて、一生けん命勉強しました。

また、教える先生たちは、広く日本中から集まりました。その中で良一郎は全体をまとめ、先頭に立って自分の理想を語りました。教える^{ないよう}内容は、そのころの日本としては、とても質の^{しつ}高いものでした。

そして、こうした^{きほくがくしゃ}冀北学舎での教えは、明治の世に数多くのすぐれた人物を送り出すこととなりました。多くの学生たちに学問を教え、地いきや日本全国で^{かつやく}活躍した人たちを育てたことは、大きなこうせきでした。

この冀北学舎は、1884年(明治17)7月、世の中のへん化によってとじましたが、その名前は、今でも地いきの人たちのほこりとして語りつがれています。



現在は大日本報徳社内にある冀北学舎のたてもの



なっとく 金次郎 ⑧

掛川に
報徳の教えを広めた
岡田家の人々だよ。



岡田家の人々と掛川市との むすびつき(かかわり)について調べよう。



岡田佐平治 (1812年～1878年)

- ・倉真の農家に生まれる。
- ・倉真に報徳社をつくる。(1849年)
- ・息子むすこの良一郎を4年間、金次郎のもとに入門させ、報徳の教えを学ばせる。
- ・金次郎の教えを受け、生活にこまっている人を助けたり、新しい田畑しやだをつくったりする。
- ・遠江国報徳社をつくり、初代社長となる。



岡田家の本家

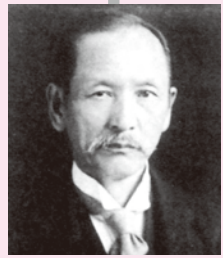


岡田良一郎 (1839年～1915年)

- ・佐平治ちやうなんの長男として倉真に生まれる。
- ・二宮金次郎の弟子となる。(1854年)
- ・父とともに遠江国報徳社をつくり、2代目社長となる。
- ・自分の家に「冀北学舎」をつくる。(1877年)
- ・日本ではじめての信用組合しんゆう(今の掛川信用金庫)をつくる。(1879年)
- ・静岡県立掛川中学校(今の掛川西高校)の初代校長となる。(1880年)
- ・遠江国報徳社を「大日本報徳社」と名前をかえ、全国の報徳社の中心となる。(1911年)

多くの人を育てた「岡田良一郎の学問の考え方」

英語や漢学のほかにも、心を育てるために作詩や作文を取り入れ、報徳についても教えた。日曜日の午前中には、農作業や道路のしゅう理などを行い、仕事をするための大切さを教えた。



岡田良平 (1864年～1934年)

- ・岡田良一郎の長男として生まれる。
- ・大日本報徳社の3代目社長となる。(1912年)
- ・国会議員ぎいんや文部大臣もんぶだいじんとなり国のために活躍する。



一木喜徳郎 (1867年～1944年)

- ・岡田良一郎の次男しなんとして生まれる。
- ・袋井市の一木家の養子ようしとなる。
- ・内務大臣や文部大臣、宮内大臣となり国のために活躍する。
- ・兄良平のあとをうけ、大日本報徳社の4代目社長となる。(1934年)

(2) 倉真財産区林

岡田良一郎が22才の時のことです。父のあとを受けつぎ庄屋になった良一郎は、報徳の教えをいかして、倉真をゆたかな土地にしたいものだと考えていました。しかし、農業をさかんにしたくても、谷あいの村では田畑を広げるにもかぎりがあります。良一郎は、（この村につらなっている山を何とかうまく利用する方法はないだろうか。）と考えていました。

そのころ、倉真の山の多くは、ぞう木でまきを作ったり、草かり場として利用したりするくらいで、村の人々の暮らしをゆたかにするためには、さほど役立っていませんでした。

良一郎は、山の利用法を考えたすえ、「区の倉真の山に、杉やひのきを植えれば、何十年後かには、ゆたかな村に生まれかわる。」



と、村人に木を植えることの大切さやよさをくわしく話しました。

しかし、ぞう木林を切り開いて木を植える仕事は、なみたいていの仕事ではありません。力のいる仕事のうえに、人手もいり、日数もかかります。毎日の暮らしにせいいっぱいの村人には、木を植えるゆとりなどありませんでした。

「木を植える山の仕事をするのはよいが、自分の田畑の仕事はだれがやるのだ。」

「木は、40年以上もたたないと使いものやお金にはならない。」

「だいいち、大苦勞して育てても、使いものになるまで生きているかわかりゃしない。まったくばからしいことだ。」

と言って、さんせいする人はほとんどいませんでした。

しかし、良一郎は、

「たしかに、今のみんなには、木を植えるゆとりはないかもしれない。だが、私たちのような苦しい暮らしを、かわいい子どもやまごにまでさせてよいのかね。そこのところをよく考えてみないといけない。」

と、一人一人に熱心に話して回りました。

しばらくして良一郎のわかりやすく心をこめた話に、村人は木を植える大切さがわかり、その作業を開始しました。足をふんばっていないとすべり落ちてしまう急な斜面に、くわをふるって木を植える仕事は、さいしょ思っていた以上に大へんで、きげんな仕事でした。

そのため村の人の中には、

「こんな仕事を毎日やっていたのでは、体がもたない。木を植えることをやめたい。」

と、良一郎に言い出す者が何人も出てきました。



良一郎は、このような人たちをはげましながらか、村人といっしょにくわをふるい、木を植える作業にうちこみました。

こうして、ようやく*牛の下地区に5*町の植林を完成させました。良一郎は、（これで、何十年後かには、この倉真はゆたかな村に生まれかわることができる。）と、苦しい仕事をふり返り、村人と完成をよろこび合いました。

ところが、せっかく植えた山の木も、2年後、山火事ですっかりはいとなってしまいました。村人たちは、がっかりして、二度と木を植えようとする気持ちにはなりませんでした。

1889年（明治22）に、国のきまりがかわり、村の暮らしを立てる費用の大部分を、村でまかなわなければならなくなりました。

*牛の下：倉真の地名

*町：1町=1ha（100m×100m）=100a。運動場ほどの広さ。

良一郎は、村長に、

「このような時代になったからこそ、もう一度、木を植えて村の費用を作らなくてはならない。」

と、さらに木を植えることの大切さを語りました。

良一郎の考えの正しさを知った村長は、さっそく村の山々に木を植える計画を立て、村人を熱心に説得しました。ところが、前の山火事でこりごりしている村人たちは、

「もうそんな話にはのらないぞ。」

「あんな一文にもならない仕事は、まっぴらごめんだ。」

と、役場におしかけ大声で反対しました。村人たちのそのあまりのはげしさに、役場ではたらいっていた人たちは、村長を一人のこして、にげ出してしまいました。

しかし、村長は、村人一人一人に、命がけで自分の考えの正しさを話して聞かせました。さすがの村人たちも、村長の考えをだんだんと理かいし、木を植える仕事が、ふたたび始まりました。そして、1912年（明治45）までかかってやっと完成しました。

当時木を植えた人々やそれを指導した人は、ほとんど木を植えたおんけいを受けずにこの世をさりましたが、その後、山の木は村の人たちのくらしをゆたかにするために大へん役立ちました。

「倉真はゆたかな村だ。」

と、まわりの村からうらやましがられるようになりました。

山の木々は、村の人の心をなごませ、美しくすんだ水は、かれることもなく倉真川に注ぎこんでいます。

倉真に住む人々は、昔の人々の努力に感謝して、今でもこの山々を「財産区林」とよんで、大切に守り育てているのです。





なっとく 金次郎 ⑨



倉真財産区議長さんのお話

今でも、地いきのみんなで山を大切に守っています。山は、手を入れないと、えだがふえ、ふえたえだで木の下まで光がとどかなくなってしまいます。そうすると、光がひつような下草した げが育たず、山は死んでしまうのです。

そこで、毎年、冬になると、約3ヘクタールの山の間まばつや下草がりをみんなで行っていきます。今、作業をしている人は、60才ぐらいの人が多く、しかも木はとても高いので大へんな作業です。また、昭和30~40年代しやうわごろより、外国から安い木材もくざいがたくさん入ってきたことや、木を切ってせい品せいひんにするにはお金がかかってもうけがないことから、財産区林からしゅう入しゅうにゅうを得ることはなかなかできません。そのため、今は、植林はほとんど行われていません。

しかし、これからも倉真しぜんの自然や地球環境かんきやうを守るためにも、みんなで山を大切にしていきたいと思っています。



今でも受けついでいる人たちが
掛川市にもいるんだ。



(3) 風吹トンネル

土方地区入山瀬の県道のかたわらに、大きなトンネルの形をした記念碑があります。

この記念碑は、今から110年以上も前、この場所にトンネルをつくるために力をつくした青野卯吉をたたえたものです。トンネルの名前は「風吹トンネル」。平成11年にバイパス道路ができてからは使われていませんが、この地区の人たちの生活にとって、なくてはならないトンネルでした。



風吹トンネルの記念碑

風吹トンネルができる前の土方地区の人たちは、掛川の町に行くのに、大へんな苦勞をしていました。それというのも、このあたりは、三方を高い山にかこまれ、その上、掛川に向かう風吹峠の道は、曲がりくねって急な坂道がつづき、「三町七曲がりの険」と言われるほどのけわしさでした。そのため、土方地区の人たちは、村でできたお茶を掛川の市場に出そうとしても、大きな荷車が使えず、馬にせおわせるか、自分たちでかついでいくしかありませんでした。そのため、掛川の町に通じる近道がほしいというのが、この地区みんなのねがいでした。

青野卯吉は、江戸時代の終わりごろ、土方村の入山瀬に生まれました。土方村の村長や、土方銀行の頭取もつとめ、村の中心になってはたらいっていた人でした。

村人たちがこまっている様子を見て、卯吉は、（風吹峠のせいで掛川に行けないのでは、みんなのくらしは楽になっていかない。今のままでは土方は、他の地区から取りのこされてしまう。なんとしても風吹峠にトンネルがほしい。）と考え、風吹峠にトンネルをほ

ろうと決意しました。そこで、計画けいかくを村人たちに熱心ねっしんに話し、協力きょうりょくをおねがいしました。

村人たちは、トンネルをつくることの大切さはわかってくれたものの、じっさいにほることにさんせいする人は一人もいませんでした。それは、風吹峠が、地形のけわしさにくわえて、「かいもち」とよばれるとてもかたい岩でできた土地だったからでした。

「風吹峠の岩は、かたくてかんたんにはほれないよ。」

「こんな大へんな工事は、村のお金では、とてもできないだろう。」と、だれも卯吉の計画に耳をかたむけようとはしません。

それでも卯吉の決心は、ゆらぎませんでした。

「わたし一人でもやらなくては。」

と、一人で何日も山へ入り、トンネルづくりのための測量そくりょうを始めました。測量にかかるお金は、すべて自分の家から持ち出したものでした。



そのような卯吉のひっ死の行動に、はじめは相手にしなかった村人たちも、やがて心を動かされ始めました。

しかし、問題は当時のお金で2,000円という工事にかかるお金でした。これは、土方村

が1年間に使うお金の半分近くにもなる大金だったため、（これは、自分の家のざいさんを全部出しても、とてもはらえるお金ではない。）と思い、卯吉はこまりはててしまいました。

そのとき、知り合いの人から、

「報徳社ほうとくの岡田良一郎社長おか だりょういちろうに相談すれば、きっと力になってくれるよ。」

という話を聞きました。岡田良一郎は、二宮金次郎の教えをもとに、遠州地方を中心えんしゅうに村起こしをすすめていた人でした。

そこで卯吉は、さっそく良一郎をたずね、熱心に計画を話しました。すると、良一郎は、

「それは大へんな計画ですね。でも、土方村をよくするためにぜひがんばってやりとげてください。」

と言って、1,000円という大金をトンネルをほるためにかすことを約束しました。

「ありがとうございます。これで、トンネルをほることができます。」工事のめどが立ち、卯吉の心に光がさしました。

風吹トンネルをほる工事は1900年（明治33）に始まりました。予想していた通り、1メートルをほるのに5日間もかかるような大へんな工事でした。それでもねばり強くほりつづけ、2年かかって、ついに三つのトンネルをほりあげました。

トンネルの大きさは、高さ2メートル、はば2メートル。人が荷車をひいてやっと通れるぐらいでしたが、このトンネルを通して掛川の町にお茶を運ぶことができるようになりました。村の人たちは、「このトンネルができたおかげで、これからは今までよりずっと楽に掛川の町まで行けるな。」

「これで土方のお茶を掛川の町にいつでもたくさん売りに行けて、村もゆたかになるよ。」

と、みんな大よろこびでトンネルを歩いていきました。

そのすがたを見て、卯吉もうれしそうにほほえみました。



ほうとく 報徳の心と夢のある掛川に



地いきボランティアが育てたシオーネ前の菜の花ばたけ

ここまで金次郎さんの報徳の教えをたくさん学んできたね。掛川市では、この教えを今でも受けつぎ、さらに広げているよ。なにげなく当たり前のようにやっていることが、実は報徳の教えから来ているんだよ。



いろいろ勉強したから、今度は自分たちでいろいろ調べたり見学に行ったりしたいな。掛川市内には、金次郎さんの教えをさまざまなボランティア活動に生かしている学校もあるんだって。



掛川って報徳の教えがいっぱい生きているところなんだね。わたしの住んでいる地区や学校にもあるのかな。もしかしたら、わたしの家にもあるかもしれないね。



現在に息づく冀北学舎

冀北学園の取組



冀北学園は金次郎の教えを広めた岡田良一郎の出身地です。

北中学校区にある保育園、幼稚園、小学校、中学校を1つの学園として『冀北学園』と呼びます。地区民をボランティアとして招いたり、地区にあるさまざまな資源を取り入れたりして、教育活動を行っています。



倉真小学校では、金次郎さんと岡田良一郎さんについて、劇などでわかりやすく紹介する「金次郎を知る会」や、地域をきれいにする「金次郎ボランティア」を年2回実施しています。



西郷小学校では、自分達が摘んだ茶葉を掛川手揉み保存会の方に教わりながら手揉み茶づくり体験をしました。



北中学校では、「学校林視察」をしました。また、技術の授業でベンチを作り、地区公民館等に寄贈します。

※学校林は地域の財産です。



城北小学校では、「まきをせおった金次郎」の授業後にゲストティーチャーのお話を聞き、金次郎のことについてさらに深く学びました。



わたしたちの学校でもいろいろな取組をしているよ。

報徳の教えが生きる掛川の学校



きん ろう
勤 労

し せい
至 誠



中小学校では、毎月2回、水曜日の業間休みをほうとくタイムとし、なかよし班で草取りや草集めをしています。



中央小学校では、毎朝運営委員があいさつ運動を行っています。
あ 明るい
い いつでも
さ さきに
つ つづけて
を めあてに 取り組んでいます。



上内田小学校では、毎週水曜日の「にこじろうタイム」で、人のため、学校のため、地域のためになる活動をしています。校内の草取りをはじめ、通学路のゴミ拾い、ガードレールの清掃も行います。



第一小学校では、グリーンカーテンを設置することで、地球に優しい環境づくりや節電に努めています。

曾我小学校では、お年寄りの方に楽しんでもらうために、5年生が計画を立て、全校で地区のお年寄りと交流会を開催しています。



大須賀中学校では、地区の防災訓練で地域の方に「手当てケア」を行っています。地域の方とのふれあいを通して、どんな人にも真心をもって優しく接することを大切にしています。



ぶん ど
分 度

すい じょう
推 譲

だい にほん ほう とく しゃ 大日本報徳社を見学しよう



国指定重要文化財大日本報徳社

掛川^{しゅう}城の近くにある
大日本報徳社を
みんなは知っているかな？



たてものは
見たことあるけど…
報徳社って何だろう？



二宮金次郎の報徳の教えを広める活動を
中心になって行っているところだよ。
みんなの家の近くにも、報徳社があるんだよ。



大講堂大広間



ここに行けば、
いろいろ調べられるね。
みんなも見学に行って、
お話を聞こう!!



なせなせ
金次郎 ③

Q1 門には何て書いて
あるんだろう？
写真をよく見て
ごらん。

Q2 だれが掛川に報徳社を
つくったのだろう？
ヒントは、45ページに
あるよ。

ほうとく 掛川報徳マップ



掛川には、
報徳に関係する
たてものや場所が
いろいろ
あるんだよ。



じんしゃ おかだていあとち
報徳神社・岡田邸跡地

報徳の森



くらみ
倉真報徳社



にしやま
西山報徳社



はつま
初馬報徳社



まほくがくしゃ
冀北学舎



とんべ
富部報徳社

- 大日本報徳社
- 報徳図書館
- 冀北学舎



うめはし
梅橋報徳社



おぬき
小貫報徳社



いりやませ
入山瀬報徳社



にし の や
西之谷報徳社



みねわかい
額向報徳社





ゆめ 夢のあるまちづくり・人づくり

みんなの力で
住みよいまちを作って
いくなだね。

ぜん し いっ せい び か かつ とう
全市一斉美化活動



かい がん せい そ う
海岸一斉清掃



わたしも参加したよ。



かい がん ぼう さい りん き ぼう
海岸防災林「希望の森づくり」



ボランティア活動



地区の花づくり



ち い き ぼう さい くん れん
地域防災訓練



ステンドグラス美術館

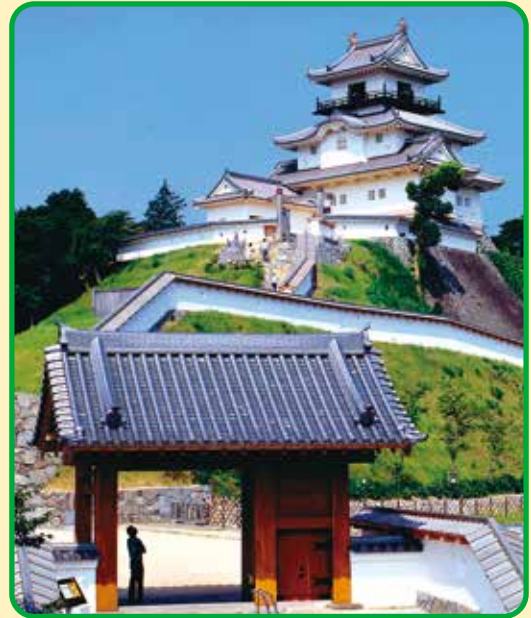
市内在住の鈴木さんから、作品約70点
と建物の寄贈を受け、「掛川市ステ
ンドグラス美術館」が平成27年にオーブ
ンしました。



べんり
便利に楽しくらせるまちにするために、
掛川市のみんなが力を合わせて夢をかな
えてきたんだよ。



しんかんせん
新幹線掛川駅ができる
(しょうわ
昭和63年)



じょうてんしゅかく
掛川城天守閣ができる
(へいせい
平成6年)



東名高速道路
掛川インターチェンジができる
(平成5年)

これからは、
ほくたちが夢をかなえて
いきたいな。



◇掛川市で開かれた「全国報徳サミット」



平成20年に、金次郎さんの教えをもとにま
ちづくりをしている全国の人たちが掛川に集
まって話し合いをしました。



まちを歩いてみると

ほうとく
報徳の教えが身について
いるのはだれかな。





どんな自分にかわってかな?



「この本を読み進んでいくうちに、
金次郎さんがすごく親しみやすくなったね。」
「^{ほうとく}報徳の教えをわすれないでいると、心がゆたかになるわ。」
「報徳ってむずかしいことではないね。
いつも当たり前に行っていることに
実は金次郎さんの教えが活着ているんだね。」
「自分をふり返ってみると、一生けん命やったことで
だんだん自分がかわってきた様子わかるね。」
「今の自分がどのくらいまでできるようになってきているか
わたしたちといっしょにたしかめてみよう。」



上にいくほど
力がついてると
いうことだよ。



きん ろう 勤 労

根気よくさい後まで
仕事をする。

みんなのために
仕事をする。



決められた仕事を
きちんとする。

自分のことは
自分でする。

し せい 至 誠

どんな人・生き物・
物事に対しても真心
をもってせつする。



真心をもってどんな
人にもやさしくする。

相手の気持ちを
大切にする。



「ありがとう」
「ごめんなさい」が
言える。

ぶん ど 分 度

自分にあつた目ひよ
うや決まりをつくつ
て、計画的^{けいかく}にすごす。
(計画的にお金を使う
など)



せつやく
節約をする。



むだづかいをしない。
・おこづかい
・エコ運動
(リサイクル、節水、
節電など)



ものを大切に使う。

すい しょう 推 譲

いつでも
みんなのことを
考えて生活する。

人を助けたり
力をかしたりする。
(自分の力をゆする)
・ボランティア活動
・ぼ金活動 など



人に席や道、じゅん
番をゆする。

■二宮金次郎略年譜

| 西暦 | 年号 | 歳 | 主要事項 | お話との関わり |
|-------|-------|----|--|------------------|
| | 江戸時代 | | | |
| 1787年 | 天明 7年 | 1 | ・二宮金次郎、小田原・栢山村で生まれる。 | |
| 1791年 | 寛政 3年 | 5 | ・酒匂川のていぼうがこわれ、川の水が流れ出し、父利右衛門の田のほとんどが荒地となる。 | |
| 1797年 | 同 9年 | 11 | ・父利右衛門、病気になる。 | 勉学にはげむ (P8) |
| 1798年 | 同 10年 | 12 | ・病気の父に代わり、酒匂川ていぼうを直す工事に加わる。夜はわらじを作る。 | 金次郎のわらじ (P12) |
| 1800年 | 同 12年 | 14 | ・父利右衛門、病気でなくなる。 | |
| | | | ・第二人を一度は奥津の親せきの家に預ける。 | |
| | | | ・早朝より入会山でたきぎをとる。 | まきをせおった金次郎 (P16) |
| 1802年 | 享和 2年 | 16 | ・母よし、病気でなくなる。 | |
| | | | ・酒匂川のこう水で田畑が全て流れてしまう。 | |
| | | | ・家族がはなればなれになり、金次郎は、おじの万兵衛の家に入る。 | |
| 1803年 | 同 3年 | 17 | ・アブラナから油をとり、あんどんの明かりに使う。 | わたしの油 (P20) |
| | | | ・荒地を田んぼにし、捨て苗を植え、稲を育てる。 | 捨て苗 (P24) |
| 1812年 | 文化 9年 | 26 | ・服部十郎兵衛に仕える。 | |
| 1818年 | 文政 1年 | 32 | ・小田原藩主大久保忠真にたのまれ、服部家の立て直しを始める。 | 服部家の立て直し (P28) |
| 1823年 | 同 6年 | 37 | ・小田原の住宅を売りはらい、桜町に移り住む。 | 岸右衛門 (P32) |
| 1829年 | 同 12年 | 43 | ・成田山で断食修行をする。 | |
| 1831年 | 天保 2年 | 45 | ・藩主大久保忠真、尊徳(二宮金次郎)の仕事ぶりをほめ、「以德報徳なり」と言う。 | 木の根ほり (P36) |
| 1836年 | 同 7年 | 50 | ・報徳訓、できあがる。 | |
| 1837年 | 同 8年 | 51 | ・桜町の立て直しをする。 | |
| 1846年 | 弘化 3年 | 60 | ・倉真村に報徳の教えが広まる。 | |
| 1854年 | 安政 1年 | 68 | ・岡田良一郎、尊徳に入門する。 | |
| 1856年 | 同 3年 | 70 | ・二宮尊徳、病気でなくなる。 | |
| 1875年 | 明治 8年 | | ・岡田佐平治、遠江国報徳社を発足させる。 | |
| 1877年 | 同 10年 | | ・岡田良一郎、倉真に冀北学舎を開く。 | 岡田良一郎と冀北学舎 (P42) |
| 1879年 | 同 12年 | | ・岡田良一郎、報徳の考えを経営理念に掛川信用金庫をつくる。 | |
| 1880年 | 同 13年 | | ・岡田良一郎、掛川中学校初代校長となる。 | |
| 1900年 | 同 23年 | | ・風吹トンネルの工事が始まる。 | 風吹トンネル (P50) |
| 1907年 | 同 40年 | | ・報徳婦人会平和観音を建てる。 | 倉真財産区林 (P46) |
| 1911年 | 同 44年 | | ・岡田良一郎、社名を遠江国報徳社から大日本報徳社にかえる。 | |
| 1927年 | 昭和 2年 | | ・報徳図書館が完成する。 | |

■参考文献1 (さらに詳しく調べたい人のための資料)

- 「おもしろくてやくにたつ子どもの伝記18二宮金次郎」 (ポプラ社) 木暮正夫
ポプラポケット文庫「二宮金次郎」 (ポプラ社) 木暮正夫
「学習漫画世界の伝記二宮金次郎」 (集英社) 笠原一男 監修
「二宮金次郎農業の発展につくした偉人 (学習漫画世界の伝記)」 (集英社) 古城武司 著
「子供のための伝記シリーズ4 二宮金次郎」 (新教育者連盟) 文:千葉ひろこ 絵:えんどうえみこ
「新わたしたちの掛川市第3版」 (掛川市地域教材研究委員会)
「この人に学びたいー掛川の偉人ものがたりー」 (掛川市教育委員会) 掛川市人づくり推進委員会 編
「輝く静岡の先人」 (静岡県) 静岡県県民部文化学術局文化政策室 編
「心のスイッチ」 (掛川商工会議所) 掛川商工会議所交流型産業創造会議 編

■参考文献2 (この本を作成するにあたって参考にした本)

- 「二宮金次郎の一生」 (栄光出版社) 三戸岡道夫
「冀北の人岡田良一郎」 (栄光出版社) 三戸岡道夫
「二宮金次郎から学んだ情熱の経営」 (栄光出版社) 三戸岡道夫
「よみがえる二宮金次郎」 (清文社) 榛村純一 編著
「冀北学舎」 (大日本報徳社) 堀内 良
「評伝 二宮金次郎」 (致知出版社) 童門冬二
「小説 二宮金次郎」 (学陽書房) 童門冬二
「小説 二宮金次郎全一冊」 (集英社文庫) 童門冬二
「入山瀬報徳社百年史」 (社団法人入山瀬報徳社) 青野英也
「大学・中庸」 (朝日新聞社) 島田慶次
「最強の経営コンサルタント 二宮金次郎の教え」 (かんき出版) 松井健一
「二宮尊徳の生涯と業績」 (幻冬舎ルネッサンス) 大貫 章
「二宮金次郎とその弟子たち」 (夢工房) 宇津木三郎
「第14回報徳サミット報告書」 (彩光堂) 掛川市教育委員会
「二宮金次郎の仕事収蔵資料解説」 (小田原市尊徳記念館)
「尊徳の道」 二宮尊徳資料館

■協力

公益社団法人 大日本報徳社

■監修者 作家 三戸岡道夫

■執筆委員

| | | |
|------|-------------------------|-------|
| 委員長 | 掛川市立原田小学校校長 (平成22・23年度) | 金原義明 |
| 副委員長 | 掛川市立原谷小学校教頭 (平成22・23年度) | 鳥居弘昭 |
| 副委員長 | 掛川市立日坂小学校教頭 (平成22・23年度) | 寺田弘 |
| 委員 | 掛川市立東山口小学校 (平成22・23年度) | 後藤英樹 |
| | 掛川市立西山口小学校 (平成22・23年度) | 浅井真木子 |
| | 掛川市立大坂小学校 (平成22・23年度) | 岡本慎也 |
| | 掛川市立上内田小学校 (平成22年度) | 前島真由美 |
| | 掛川市立中小学校 (平成22年度) | 杉山好美 |
| 挿絵 | 漫画家 | 杉山武志 |

| | | |
|-----|-----------------------|------|
| 事務局 | 掛川市教育委員会教育長 | 杉浦靖彦 |
| | 掛川市教育委員会教育次長 (平成22年度) | 深川喜春 |
| | 掛川市教育委員会教育次長 (平成23年度) | 竹原照彦 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課長 | 青野雅和 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課指導主事 | 三輪裕子 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課指導主事 | 後藤克巳 |

| | | |
|--------------------|-------------------|------|
| 改訂版事務局 (平成25年版) | 掛川市教育委員会教育長 | 浅井正人 |
| | 掛川市教育委員会教育次長 | 平出行良 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課長 | 佐藤嘉晃 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課指導主事 | 澤崎忍 |

| | | |
|--------------------|-------------------|-------|
| 改訂版事務局 (平成28年版) | 掛川市教育委員会教育長 | 山田文子 |
| | 掛川市教育委員会教育次長 | 松本一男 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課長 | 佐藤嘉晃 |
| | 掛川市教育委員会学校教育課指導主事 | 染葉美智子 |

なるほど なっとく 金次郎さん

初版 昭和63年 3月31日 発行「心のともしび」
第二版 平成13年 3月31日 発行「心のともしび」
第三版 平成23年 9月30日 発行「なるほど なっとく 金次郎さん」
改訂版 平成25年11月22日 発行「なるほど なっとく 金次郎さん」
改訂版 平成28年 5月20日 発行「なるほど なっとく 金次郎さん」

発行者 掛川市教育委員会
掛川市長谷一丁目1番地の1
電話0537-21-1156

印刷所 (株) アビサレ

| | |
|--------------------|----|
| 掛川市立 小学校 中学校 | 名前 |
|--------------------|----|